

# 厚木市史たより 第14号

平成28年3月1日

題字は渡辺華山筆「游相日記」から文字を抽出して作成したため、清音の「たより」としました。

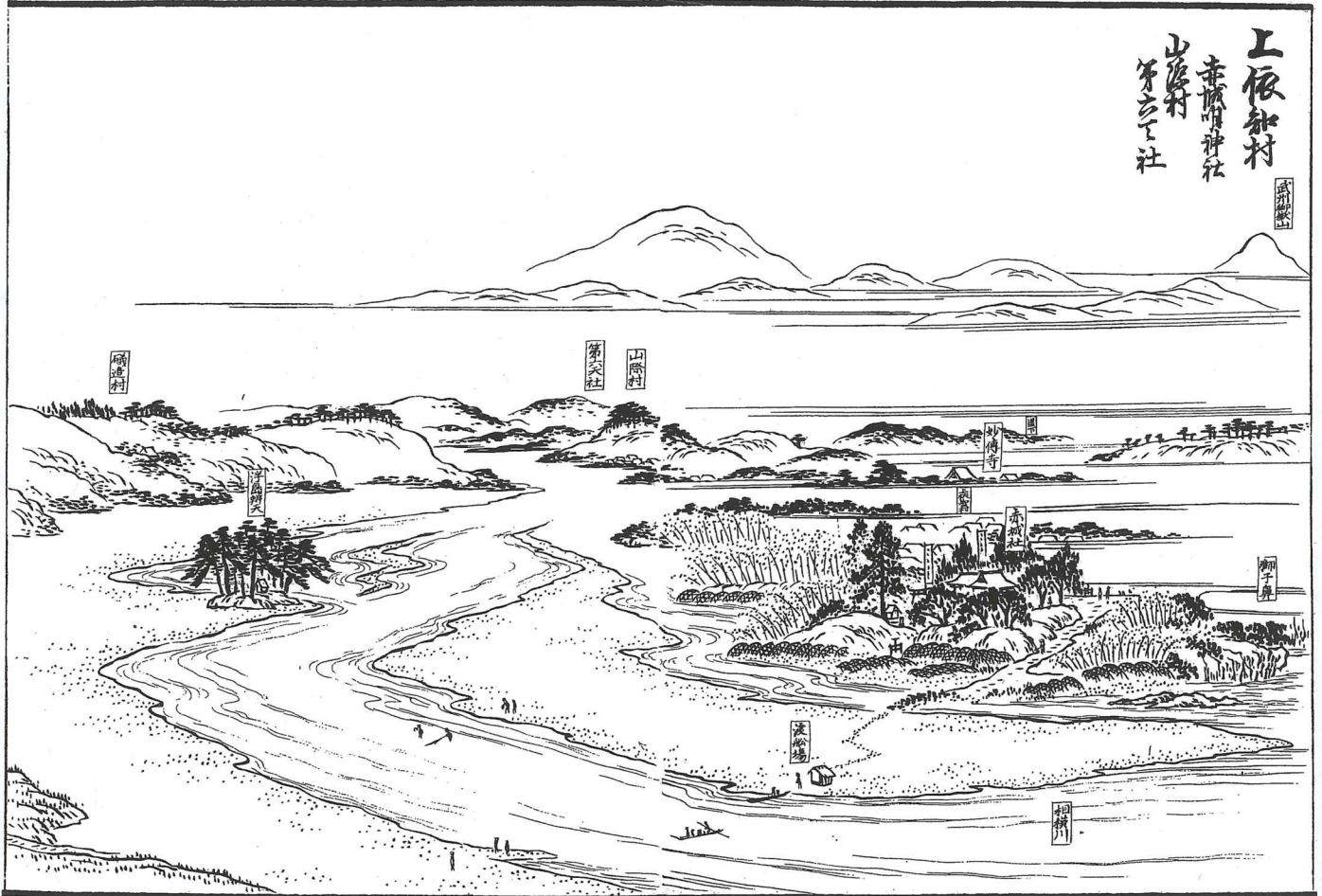


図1 上依知村渡船場「相中留恩記略」巻之10愛甲郡之1（『厚木市史』近世資料編(6)所収）  
手前から奥へ相模川が流れ、上依知村渡船場の様子が見える。赤城明神社(赤城社)は現依知神社。

## 八王子平塚道

厚木市史編集委員会委員長 内藤佳康

### 1 はじめに

厚木市域には、矢倉沢（南足柄市）往還・八王子平塚道・大田道・甲州道・信玄道など多くの道が通っています。特に厚木の町は、これら主要な道が集まり、人々との交流や物資の集散地として賑わいました。今回古道と道筋の旧跡を尋ね歩くことをねらいとして、市域を南北に貫く八王子平塚道を紹介します。

### 2 上依知から金田まで

八王子平塚道は武州道や平塚道と称し、武州八王子と相州平塚を結ぶほぼ南北に貫く主要街道です。東京都八王子市から相模原市の相原橋本へ上溝へ当麻へと南下し、ここで相模川を渡河、厚木市の上依知に至ります。この上依知から当麻には古くから渡船場がありました（図1・図3①（以下図3は省略））。明治期には上依知でこの渡し場を管理していましたが、その後、昭和橋が永久橋として昭和五年（一九三〇）二月起工し、翌六年十一月竣工したのを機にその役目を終えました。現在、依知神社よりやや下流、上依知の相模川に沿った道路脇に「上依知渡船場」跡の碑（平成十九年三月厚木市）が建てられています。

ここから、上依知通称女井戸に入ります。道幅二間（3.6m）、やや曲がりくねった道を通り抜け、緩い登りの男井戸坂に掛かります（同②）。付近には星下り伝説の日蓮宗妙傳寺があり、山門は毘沙門天（多聞天）・持国天を安置する朱塗りの二

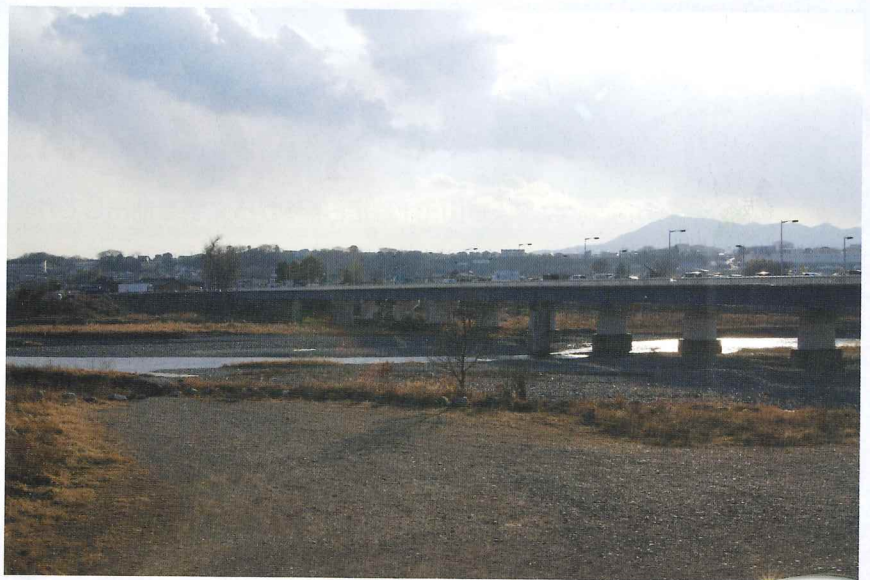


図2 旧上依知渡船場付近の相模川遠景 対岸依知神社、右手奥の稜線が大山。

天門、境内には一丈六尺（凡そ4.8m）の木造釈迦如来立像を安置しています。いずれも市の有形文化財に指定されています（『厚木の歴史探訪』（以下『歴史探訪』と記す）寺院No.43）。男井戸坂を過ぎると旧国道129号を横断して堂坂にかかります（同③）。この坂の途中に七面堂（観音堂）がかつてあったので堂坂と呼ぶようになったといわれています。堂坂はかなり急坂となっており、途中に天保十一年（一八四〇）正月造立の道祖神があります。さらに堂坂を登って行くと自然石で高さ142cm、市内で最も大きい慶応三年（一八六七）造立の「馬頭観世音」碑が見えてきます（同④）。この坂を上りきると、再び旧国道129号

を横断、岐路に明治二十六年（一八九三）不動尊像を載せた道標が見えてきます（同⑤）。この道標は八王子平塚道、大山道等の岐路に設置されています。四面が道標となっており、北は八王子・埼玉県・津久井・橋本・久保沢・田名・上溝・当麻山無量光寺・武州高尾山・上依知星下妙傳寺・上依知渡船、南は厚木・平塚・大磯・小田原・馬入と記されています（東・西の銘文省略）。ここからは、依知台地上を八王子平塚道はさらに南下し山際に至ります。山際に入ると道幅九尺（2.7m）（『新編相模国風土記稿』（以下『風土記稿』と記す）で、現在でも道幅が狭く昔の道幅と大差がありません。さらに南下すると左手にこんもりとした森の中に山際神社が見えてきます（同⑥）。境内には石造物が集められており、その中に「道祖神」があり道標を兼ねています。塔身高さ70cm、建立年代不詳ですが、右側面に「南 大山 阿つき道」、左側面に「北 八王子道」、裏面「東 磯部道」と刻まれています。元は八王子平塚道に沿ったところに置かれていたものでしょう。

さらに南下、山際郵便局そばに碑高93cm、天保十三年（一八四二）念仏講中の建立による道標があります（同⑦）。正面は童女を菩提する銘文となっていますが、右側面に「右 大山道」、左側面に「左 厚木道」とあります。ここが大山道（府中道）の分岐であったことが分かります。

さらに南下して関口に入ります。道幅は九尺（2.7m）、集落の中を通り、ほぼ直線を取り続けますが、現在道幅が狭く、自動車の通過時に歩行者は注意が必要です。厚木市農業協同組合依知支所を過ぎ、中依知に入ります。道路脇に昭和九年（一九三四）九月十三日に建立された日蓮宗宝塔山蓮生寺の題目碑が見えてきます（同⑧）。題目碑は台石を含め総高凡そ3.4mの大きさがあります。蓮生寺はこの題目碑から東へ依知台地の東端300mに位置します。日蓮の靈

跡「星下りの奇瑞」の市内三寺の一つです。墓域内に『甲陽軍鑑』を著した甲州流軍学者小幡勘兵衛景憲及びその一族の墓碑があります。また本堂天井画は郷土が輩出した絵師井上五川とその弟子五溪によって描かれています（『歴史探訪』寺院No.37・『厚木市史』近世資料編(3) 866頁ほか）。

題目碑前から南下するとすぐ国道129号に接します。この国道129号を横断すると、追分に分岐路があり、ここで甲州（山梨県）に通ずる「信玄道」に接します。「信玄道」はここから右に分かれ北上します。現在、この分岐点に厚木市が昭和六十一年に設置した「信玄道」の標柱が建てられています。

ここから東方に、依知台地の下段の相模川に沿った杉林の中に浅間神社が鎮座しています。境内に塔身98cmの庚申塔兼道標があります（同⑨）。かなり碑面が剥落しており、昭和四十四～四十五年の調査で元文五年（一七四〇）八月と判読できましたが、『野だちの石造物』庚申塔No.48、現在は判読できない状況となっています。かろうじて右側面に「たいまみち 八王子ミチ」と読めます。境内の鐘楼に掛かる銅鐘は貞和六年（一三五〇）に铸造されました。現在県の指定重要文化財です（『厚木市史』中世資料編 637頁）。

再び八王子平塚道に引き返ししましょう。「信玄道」の標柱からさらに南下、下依知で八王子平塚道は工場等の敷地となっていて一時途切れますが、依知台地の南端から低地となる金田の日蓮宗妙純寺前に通じます。この寺も日蓮の霊跡「星下りの奇瑞」の市内三寺の一つです。境内には江戸時代の人気歌舞伎役者坂東彦三郎寄進の題目碑があります（『厚木市史』近世資料編(3) 793頁）。妙純寺前を左折し再び八王子平塚道を南下（同⑩）、「牛久保用水」跡の標柱（昭和六十三年三月）を過ぎます。この牛久保用水は「金田用水」又は「本間用水」と呼ばれ、本間重連が開

削したと伝えられ、現在も金田地区の水田を潤す重要な役目を果たしています。さらに進むと旧国道129号に出ます。少し歩くと相模川・中津川・小鮎川の三川合流地点付近に達し対岸に厚木の町並みが見えてきます(同⑪)。中津川と小鮎川に架かる橋を渡ると厚木宿頭で江戸青山方面を起点とする矢倉沢往還に合流します。

### 3 厚木から酒井まで

厚木で八王子平塚道と合流した矢倉沢往還は、酒井から右に折れ愛甲方面へと続きますが、分岐点付近に浄土宗法雲寺があります。開基は小田原北条氏の家臣であった山角勝長、のち徳川氏に仕え酒井・長沼を領しました。境内には山角氏累代の墓地があります。また隣接して薬師堂があり、十二年に一度寅年に開帳されています。現在も行われている双盤念仏は市指定無形民俗文化財、不動明王立像は県の指定重要文化財です(『歴史探訪』寺院No.7・『厚木市史』中世資料編729頁)。さらに西奥の玉川土手付近に鎮守飯出神社が鎮座しています。本殿は宝永三年(一七〇六)の建築、境内の鐘楼に掛かる梵鐘は無銘ながら古い形態を残しているところから市指定有形文化財となっています(『厚木市史』中世資料編

681頁)。

厚木で矢倉沢往還と合流した八王子平塚道は、酒井で矢倉沢往還と分かれ、そのまま南下します。八王子平塚道に沿った地域を酒井宿と称し、左右に家並みが立ち並び(同⑫)、道幅も三間(5.4m)と広くなります(『風土記稿』)。下酒井バス停の場所付近の小河川には、かつて「小田原橋」が架かっていました(同⑬)。この川は、旧田村用水が大雨で増水した時、一時的に余り水を相模川に放水する「そらし用水」となっていました。現在、欄干橋名支柱石と石橋供養碑がバス停脇に置かれています。

### 4 酒井から平塚まで

酒井を過ぎ、戸田に入ると鎮守森の中に子易神社(同⑭)が見えてきますが正式の参道は西側から入ります。安産祈願の神様として柄杓を奉納することが行われていました。無事安産が達成されると倍の柄杓を奉納したといわれます。境内奥に震災記念碑等の石造物がありますが、剥落が激しい庚申塔兼道標と思われる石造物に「右 渡船道」「大山道」と刻まれています(『歴史探訪』神社No.8)。この戸田で大山道と八王子平塚道が交わり人馬の継ぎ立てを行っていました。『風土記稿』によると「大山及駿州富士山



図3 八王子平塚道  
(『厚木の歴史探訪』10 古道と道標より作成)

への道(長後通と唱ふ、あり、又東海道平塚宿より武州八王子道も係れり、共に人馬の継ぎ立てをなす、大山道は東村へ八町、西、下糟屋村へ一里、八王子道は南、高座郡門澤橋田村へ一里、北、愛甲郡厚木村へ一里を継送れり、)とあります。大山参詣は高座郡門澤橋(海老名市)から渡して対岸戸田へ渡河し大住郡下糟屋村へと向かいました。この戸田の渡し風景は「相州大山道中戸田川の渡し」として歌川広重の錦絵にも描かれています。

八王子平塚道から小道を西側に入ると中戸田児童館向かいに八幡神社が鎮座しています。その一角に庚申塔があり、道標も兼ねています(同⑮)。碑正面に「庚申塔」、右側面「寛政六甲寅六月吉日 講中」、左側面「左 大磯道」と刻まれています。八王子平塚道をさらに南下すると、下戸田の鎮守菅原神社に至ります(同⑯)。この神社は前記八幡神社と同じく道から入った住宅地に囲まれています。境内左奥には、石造物がまとめて置かれています。境内左奥には、朱色に塗られた不動明王坐像を載せた道標があります(図4)。塔身正面に「村中安全 天下泰平 五穀成就」、右側面に「元治元甲子年六月吉日 南 大いそ道」、左側面に「北 阿つぎ 八王子道」とあり、台石には講中連名十四人が刻まれています。

他の石造物もまとめて置かれていますので、元は八王子平塚道に沿った場所に建てられていたもので



図4 戸田菅原神社境内の不動明王像道標

しよう。

戸田を過ぎると、平塚市に入り大神・田村・四之宮・八幡を経て平塚に至り旧東海道と接します。天保十二年（一八四一）『風土記稿』は「平塚新宿（中略）脇往還二條あり、一は厚木<sup>愛甲郡</sup>八王子<sup>武州下向</sup>」と東海道からの分岐を記しています。安永四年（一七七五）八月毛利家陪臣中山又八郎の「毛利庄遺跡探訪記」には、平塚新宿から厚木までの街道筋の様子が良く描かれています。途中、田村では立場・茶屋や道標のこと、厚木では町の中央に掘られた大溝に水が流れており、街並みがこの堀の左右に形成されていた情景が活写されています（『厚木市史』近世資料編(3)文化文芸 740頁）。

## 5 おわりに

このように八王子平塚道は平塚～厚木間は相模川に沿っており、愛甲郡を経て、高座郡から武州までは内陸路となります。古くから相州と武州を結ぶ重要なルートでした。

参考文献 『厚木の歴史探訪』10古道と道標 厚木

市文化財協会（二〇一二年）

## 厚木市市域の人々と

### フィリピン共和国

厚木市史編さん委員会委員長 樋口雄一

今年の一月末に天皇がフィリピン共和国を訪問し、フィリピン人や日本人の戦争犠牲者の慰霊の旅をされたことはまだ記憶に新しいことです。

このフィリピンには厚木出身の兵士も多く動員されてきました。なかでも戦争末期に連合軍のフィリピン上陸が予想されると中国に動員されていた甲府を拠点とする部隊が急遽動員されたのです。

神奈川県内の兵士の多くは陸軍甲府連隊に徴兵されてきました。そこで昭和十四年（一九三九）四月に編成された楓<sup>かき</sup>兵団に属する第二一〇連隊が組織されました。いわゆる郷土部隊です。当初、部隊は中国戦線で転戦していましたが、昭和十九年（一九四四）四月十七日に上海からフィリピン、マニラに向かいました。船団は十五隻で十一隻の戦艦に守られていたと言われています。

二一〇連隊の兵士が乗ったのは第一吉田丸という輸送船で兵士は三五〇〇人が乗船していました。第一吉田丸は進行方向左側の最後尾に位置していました。

第一吉田丸は明日マニラに着くという昭和十九年四月二十六日午前三時に米潜水艦の雷撃攻撃を受け、わずか三分で海没してしまいました。三五〇〇人の内、県内出身者を含む軍人や船員約二七〇〇人が一瞬で死亡しました。軍で最も大切にされていた軍旗、兵器を運ぶ馬一九二頭、兵器、食糧なども総て海没してしまいました。連隊長も含めて二五八八人が犠牲になりました。

この第一吉田丸で厚木市内在住で亡くなられたの

は「厚木市戦没者名鑑―英霊を偲んで―」によれば二十九人に達しています。それによると、旧玉川村では五人が亡くなられていますが、別の資料である「玉川村戦没者名簿」では四人が亡くなられたという記録が残されており、「マニラ洋上に於いて壮烈なる戦死を遂げらる。」とされています。遺族へは救助された兵士によってマニラ現地の木で位牌を造って送ったと記録されています。翌昭和二十年四月十六日、鶴見總持寺（横浜市）で合同慰霊祭が行われ、同日「無言の凱旋をせらる」といわれています。

この二十九人も人が一瞬で亡くなったことは、日清・日露戦争以来の近代厚木地域の戦争の歴史の中では最も大きな数字ではないでしょうか。

なお第一吉田丸の海没から生き残った二一〇連隊の兵士の多くも、レイテ島や他のフィリピン各地で亡くなられました。天皇のフィリピン慰霊の旅を、地域から改めて考える事も意味のあることだと思います。

参考文献 樋貝義治『戦記 甲府連隊』サンケイ新聞社（一九七八年）

## 厚木市史たより 第14号

平成28年3月1日発行

編集 厚木市教育委員会文化財保護課

発行 厚木市

住所 神奈川県厚木市中町三ー一七ー一七

電話 〇四六ー三三三ー二〇六〇

FAX 〇四六ー三三三ー〇〇八六

「厚木市史たより」は厚木市ホームページにも掲載しています。